

黒書院の秋 ～〈黒書院〉四の間～

重要文化財（絵画）二条城二の丸御殿障壁画の大半は、徳川家三代将軍、家光（1604-51）の時代、寛永3年（1626）の二条城大規模改修に伴い、狩野派の絵師たちによって描かれました。今年度は、「シリーズ転調の花鳥」として、二の丸御殿の各棟の北東にあたる部屋に描かれた障壁画に焦点を当てて紹介しています。各棟の北東の部屋の障壁画は、他の部屋と共通しつつも、異なる特徴を持つ花鳥図が描かれています。

今回の展示では、二の丸御殿〈黒書院〉の北東にある四の間の障壁画《菊図》と《秋草扇面散図》を紹介します。

〈黒書院〉の機能と障壁画

二の丸御殿の〈黒書院〉は、江戸時代前半までの史料では、「小広間」と記されていました。〈大広間〉が、将軍と大名、あるいは異国の使者等との対面所であったのに対し、「小広間（黒書院）」は、高位の公家や徳川家に近い大名との対面に使われたとされます。寛永3年（1626）9月6日から10日まで行われた、後水尾天皇（1596-1680）の二条城行幸の際、小広間は、摂家や大臣等、高位の公家達の饗応の場となりました。

〈黒書院〉の各室に描かれた障壁画には、大きく三つの特徴があります。一つ目は、切箔や金砂子、盛り上げ胡粉といった手の込んだ技法を使うこと、二つ目は、長押の上と下で、画面と画題が変わること、三つ目は、一の間・二の間は春、三の間は秋から冬、今回ご紹介する四の間は秋というように、季節の景物を描くことです。これらの特徴は、床から天井まで続く大画面に、常緑樹である松と、異国の珍鳥や権力を象徴する鷹を描く〈大広間〉障壁画とは対照的です。この違いは、〈大広間〉では、将軍の不変の権威を誇示することが目指されたのに対し、〈黒書院〉では、対面相手を、特別な相手として迎え入れ、親密な関係を構築することが目指されたという、場の機能の違いに由来すると考えられます。

特別な「秋」

今回展示している〈黒書院〉四の間は、棟の北東に位置し、棟の西側の南北に位置する一の間・二の間の裏手にあたります。障壁画もまた、一の間・二の間は春の景物であるのに対し、四の間は、長押上に薄と扇面、長押下に菊、というように秋の景物を描きます。〈黒書院〉の表と裏という位置付けが、すなわち春と秋という対照的な季節を描くことで、強調されていると考えられます。

四の間長押上の《秋草扇面散図》には、風に吹かれる薄と、風に舞う扇面が全部で46面描かれます。扇面には、切箔、金砂子、盛り上げ胡粉のほか、水墨等、さまざまな絵画技法を使って花鳥草木、人物風景等、一面ずつ異なるモチーフが描かれます。同じ図様は一つもなく、さながら小さな美術館のようです。このように、秋草を背景にした

扇面貼付屏風が、15世紀半ばには、天皇や将軍の周囲において鑑賞されていたことが、史料から分かっています。

長押下の《菊図》は、菊と垣根、水流を描きます。菊花の露に不老長寿の効能があるとする、いわゆる「菊水伝説」は、中国から日本に伝わり、美術工芸品の意匠や、能等の芸能にも取り入れられました。菊の花びらを浮かべた酒を飲んで不老長寿を願う、重陽の節句の行事もまた、中国から日本に伝わり、平安時代前半には、宮中行事となります。四の間に描かれた《菊図》の菊と水流は、まさにこの菊水伝説を思い起こさせる図様です。

二の丸御殿には、〈黒書院〉三の間や、〈式台〉老中二の間、〈遠侍〉と〈白書院〉の帳台の間等、他にも秋の景物を描く障壁画がありますが、これらは、雁や鷺、萩や苺田等、身近なモチーフで秋を表します。しかし、ここ〈黒書院〉四の間ににおいては、様々な画題が描かれた扇面、長寿を象徴する菊というように、華やかさや吉祥的な意味を強調しつつ、秋を表している点に、特徴があると言えます。

若き絵師と古様

〈黒書院〉四の間障壁画は、狩野尚信（1607-50）を中心に制作されたと言われます。尚信は、寛永期の二条城障壁画制作を率いた狩野探幽（1602-74）の弟で、当時、20歳の若さでしたが、四の間障壁画には、その優れた画才が既に表れています。

長押上の《秋草扇面散図》では、風に揺れる薄の間を、扇面が、重なり、あるいは離れ、横や下を向く等変化を付けて、軽やかに舞っています。これら薄と扇面の輪郭が描く弧線が、リズムカルに反復されますが、他方、長押下の《菊図》は、垂直方向に伸びる菊、水平方向に広がる水流と共に、垂直と水平、両方を持つ竹垣を描くことで、垂直と水平が強調された構図となっています。こうした弧線の反復や、水平、垂直という幾何学的図形に基づく構図は、元和寛永期（1615-44）における、狩野派絵画の特徴の一つとされます。

他方、《菊図》には、当時であって古様と呼べるような特徴も見出されます。それは、菊が、柴垣や竹垣、金雲、土坡等と重ねて配置される点です。このようにモチーフを重ねて空間の奥行きを表す方法は、狩野派絵画においては、16世紀後半から続く、伝統的な空間表現でした。対照的に、探幽が描いた〈大広間〉一の間から三の間の障壁画は、モチーフの重層化を極力排した、新しい時代様式に繋がるような、空間表現がなされています。

尚信は、四の間障壁画において、伝統的な奥行き表現と、同時代的な構図感覚を巧みに組み合わせ、華やかでありながら、繊細さと軽やかさを備えた四の間障壁画を完成させたのです。